

接尾辞「ばむ」「づく」の意味

はじめに

接尾辞「ばむ」「づく」は、「属性を發揮する」意味を表わすと
言われる。¹ところで、この「ばむ」「づく」を語構成要素とする語
詞の中には、「けしき」「心」「情」「ゆゑ」「由」な
ど、その語基を共通にするものが有り、その意義差は必ずしも明ら
かでない。

一 「ばむ」への疑問

「ばむ」の意味について、北山谿太氏『源氏物語辞典』は、「そ
の状態の少しく見ゆる意を表はす語」「ばむ」の頃」と述べ、又、
『岩波古語辞典』は、「ハミ(噓)の転。その動作・状態になりき
らず、一部分に食いついている意」「ばみ」の項」と説いている。

東 辻 保 和

語源についてはともかくとして、『源氏物語辞典』の説明には納得
しがたい点が存する。

1 手を書きたるにも、深きことはなくて、ここかしの、点なが
に走り書き、そこはかとなく気色ばめるは、うち見るに、かどか
どしく気色だちたれど(源氏、帯木五〇一三)

2 御髪青やかにて、奉りたる御衣いささか塵ばみ煤けず、鮮かに
見えたり。(榮花、卷一五、四五五—八)

3 其ノ泉ノ色頗ル黄バミタリ(今昔、卷三一、一三語)

右の例においては、「ばむ」動詞を修飾している語は、いずれも、
程度・数量の小さいことを意味している。しかして、被修飾語たる
「ばむ」動詞は、その修飾語と意味において矛盾してはいないはずで
あるから、この種の事例に関する限り、『源氏物語辞典』の説くこ
ころは妥当性を有するように考えられる。しかしながら、他方にお
いて、次の如き事例も存する。

4 誰も、さばかりになりぬる御有様の、いとやつればみ、ただありなるやはあるべき。(源氏、匂宮、三五七—一一)

5 うちもてなしたるありさま・かたち、いと気色ばみ、なつかしくなまめき(夜の寢覚、巻一、五四—三)

6 内侍はねびたれど、いたくよしばみなよびたる人の、さきさきもかやうにて心動かす折々ありければ(源氏、紅葉賀、三〇—一一)

7 鼻高ナル者、鼻崎ハ赤ミテ、穴ノ移リ痛ク湿_クバミダ_ルハ、「涙ヲ糸モ中_ニヌナメリ」ト見エ(今昔、巻二六、四五九—二)

8 女のまかづると思ひて、いみじく気色ばみて、「御おくまつらん」とてすぐるを(夜の寢覚、巻二、一八〇—二六)

これらの事例においては、「ばむ」動詞の意義を『源氏物語辞典』の説くところに、もし従うならば、上接の連用修飾語(いづれも程度の一通りでないことを意味する)との間に、意味的矛盾を来すことにならうと考えられる。次の事例においても同様のことが言えよう。

9 繁く渡り給ひつつ、お前の人遠くのどやかなる折は、ただならず気色ばみ聞え給ふごとに、胸つぶれつつ(源氏、蛭、四五—一四)

10 女房なども大人々々しきはすくなく、若やかなるかたち人の、ひたぶるに打花やぎざればめるはいと多く(源氏、若菜上、三七—七—九)

このような次第であるから、「ばむ」の意義を、一概に「その状態の少しく見ゆる意」と解することには賛同しがたいのである。

二 語基比較

「ばむ」「づく」と結合している語基を、『分類語彙表』を基準に分類し、両者の比較を試みてみよう。

(体言性語基)

抽象的 関係	くばむ	くづく
人間の主体	懸想 心 情 あて	世
人間活動 (精神および行為)	薄黄 黄 黄黒 塵	愛敬 功 癖 心 さ かしら 情 をこ
自然物および自然現象		色 片 端 病
生産物および用具 物品		

〔動詞性語基〕

抽象的 関係	打隠れ	
精神および 行為	あざれ うちまぎれ され 痴れ 好き なれ うちなれ	
自然現象	古い かれ 萎え ぬれ やつれ	古い

〔形容詞語幹性語基〕

抽象的 関係		ちか(近)
精神および 行為	をかし	
自然現象	赤 黒 白 青	

一、傍線部は、それが「ばむ」「づく」両者に共通する語基であることを示す。

二、体言性語基に関しては、意義領域を比べてみると、両者はよく似通い、且、共通語基の少くないことが判る。

三、動詞性語基および形容詞語幹性語基は、主として「ばむ」と

結合し、「づく」とは殆ど結合していない。²⁾ 且、殆ど「精神および行為」と「自然現象」とに限られている。

四、色彩名語基は、すべて「ばむ」と結合し、「づく」と結合したものが無い。

等を指摘することができる。

三 意義比較

「ばむ」「づく」の意義は、次表のごとく比較対照することができる。

動作	意 志 的	状 態	作 用	自 然 的	
する	する	いる	ある	なる	
する	振舞う(その様子を する)	その様子が見える そのように見える	ある状態がそなわって いる	ある色を帯びる 何かが次第にそなわる	ばむ
	C	B	A	A	
		ある状態がある	ある状態がそなわって いる	ある状態になる ある状態が加わる もと無かった所に生じ る	づく
		b	a	a	

表中の点線は、意義単位で区切ったものである。又、A・a、B・bは、それぞれ「ばむ」と「づく」とが密接に対応し合う意義領域であることを示し、Cに対しては、「づく」の方に対応し合う領域が見当らないことを示す。抽象の段階を更に高めれば、A・aは「なる(成)」、B・bは「ある・いる」、Cは「する」と表現し得よう。更に纏めて言えば、A・B(A・a・b)は「自然的作用・状態」、Cは「意志的動作」となるであろう。

以下順次、用例を掲げつつ説明を加えていくことにしたい。猶、紙幅の都合で挙例を最少限度に止めざるを得ないことを、予め断っておく。

△ある色を帯びる▽

11 あかばみたるしきしに、かきていれたり。(宇津保、藏開中、

一一三〇—七)

12 物准ル中ニ古ノ様ノ黒バミタル物アリ(打聞集、三一五)

因みに、色彩名語基の中では、「黄ばむ」の用例が最も多い。

△何かが次第にそなわる▽

13 正月二十日ばかりになれば、空もをかしきほどに風ぬるく吹き

て、お前の梅もさかりになりゆく。大方の花の木どもも皆バミタル気色

ばみ、霞みわたりにけり。(圈点筆者。源氏、若菜下、二九一

一一)

△ある状態になる▽

14 今年よりだに、すこし世づきて、改め給ふ御心見えば、いかに

嬉しからむ(源氏、紅葉賀、二八四—一)

因みに、「世づく」は肯定形二九例、否定形(世づかず)四〇例で、否定形が優勢である。

△ある状態が加わる▽

15 この君、いとあてなるに添へて愛敬づき、まみのかをりて、あ

みがちなるなどを、いとあはれと見給ふ。(源氏、柏木、一五三

一一二)

△もと無かったところに生じる▽

16 御年廿三四ばかりにおはしませば、盛にめでたう、髭なども少

しけはひづかせ給へる、「あなあらまほし、めでたや」とぞ見ゆ

る御有様なめるかし。(栄花、卷一三、四〇六一—五)

△ある状態がそなわっている▽

17 川にそひたる山のふもとなる家の、くちをしからぬ、あてばみ

たるさまして、作りさしたる気色なり。(浜松中納言、卷一、一

七七—一一)

18 台盤なども、かたへは塵ばみて、畳所引返したり。(源氏、

須磨、一〇—一一)

19 おなじ日着給ふべき御消息聞えめぐらし給ふ。げに似げづいた

るども見むの御心なり。(源氏、玉鬘、四〇三—一一)

20 鈍色、香染など、あまたかさねてうちやつれ給へる、色々に装

束きたらんよりも、なまめかしきさまかはり、ほげづきたふとげ

になりて(浜松中納言、卷二、二四八—二)

△ある様子をしている▽

21 中川の程おはするに、ささやかなる家の木立などよしはめるに、

よく鳴ることを、あづまにしらべて、かきあはせ(源氏、花散里、

四四五—一四)

22 亦出羽ノ守大江ノ時棟ト云フ者有キ。其レモ同時ニ外記也シ時、

腰屈テ嗚呼付テナム有シ。(今昔、卷二八、九四—二)

△ある状態にある▽

23 はは君、いとものものしくあいぎやうづきて、かみうるはしく、

きよげになり(宇津保、国譲中、一三八〇—一〇)

24 老いかれにたれど、いとくうづきて頼もしう聞ゆ。(源氏、総

角、一七六一—三)

△その様子が見える▽

25 手はあしげなるを、紵らはしさればみて書いたるさま、品なし。

(源氏、夕顔、一六三一—二)

△そのように見える▽

26 山里にうち隠ればみては、めやすき人は、おのづからあるやう

も侍らんかし。(浜松中納言、卷四、三七四—七)

27 簀子に、いと寒げに身ばそくなえはめる童一人、人々居たり。

(源氏、橋姫、二〇—一一)

△振舞う。その様子をする▽

28 されど、さる方を思ひ離るる願ひに、山深く尋ね聞えたる本意

なく、すきずきしきはざりごとを打出で、あざればまんも、

事にたがひてや、など思ひ返して(源氏、橋姫、一五一—七)

△意志や感情を外に表わす▽

29 初めより懸想びても聞え給はざりに、引返しけさうばみま

めかむもまばゆし。(源氏、夕霧、二二—一八)

30 わが御なかの打ち気色ばみたる思ひやりもなく、むつびそめ

たる年月の程をかぞふるに(源氏、横笛、一八三—一〇)

以上の如く、「自然的作用・状態」を表わす意義領域においては、

「ばむ」・「づく」は相互に重なるところが有り、「意志的動作」

を表わす意義領域においては重ならないと考えられる。

吉沢義則博士は『源語積泉』の「『ゆゑづく』と『よしづく』附

『よしばむ』・『よしめく』において、次の如く説かれた。

「ゆゑづく」「よしづく」の自然的表現であるのに対して、「よし

しばむ」「よしめく」は『筆者注』故意的表現である。わざと、

さう見せかけるのである。

右の高説のうち、「ゆゑづく」「よしづく」に関するところは、そ

の二語に限らず、すべての「づく」動詞に適合し得ると考えられるが、

「ばむ」動詞に関しては、博士の言われる「故意的表現」のみでは

覆いきれないところが有る。仮に「よしばむ」に限っても、「自然

的作用・状態」表現と、「意志的動作」表現との両様の存在するこ

とを否定し得ないように思う。

四 共通語基語の比較

「ばむ」「づく」を語構成要素とする語詞の中には、はじめにも述べた如く、語基を等しくするものが管見によれば五種存する。本節では、これらの共通語基を有する語詞を比較することによって、前節に述べた仮説を検討してみようと思う。

「けしきばむ」「けしきづく」

「ばむ」動詞においては、「けしきばむ」の例数が最も多く、調査した限りでは八八例を数える。それに対して「けしきづく」は、僅かに二例である。そこで、先ず「けしきばむ」を、その用法の上から分類整理してみることしよう。

I 主体が人間であるもの

A 「けしきばみ」+動作動詞

a 「けしきばみ寄る」

31 すき心あらむ人は気色ばみ寄りて、人の御心ばへをも見まほしう、さすがにいかがと ゆかしうもある御けはひなり。(源氏、橋姫、一五―三)

b 「けしきばみ(て)言ふ(申す・聞ゆ)」

32 あなうたてかしかましなと御前ちかき人などのけしきはみいふをもきゝいれず(枕草子、二二八段六)

c 「けしきばみありく(わびありく)」

33 この君のかう気色ばみありき給ふを、まさにさては過ぐし給ひてむやと、なまねたう危がりけり。(源氏、末摘花、二三九―一三)

d 右以外の「けしきばみ(ても)+動作動詞」

34 又なめのに移るふ方あらむ人を恨みて気色ばみ背かむ、はたをこがましかりなむ。(源氏、帚木、四七―五)

35 このごろは後にといひし人ものぼりてあれば、それになほしもあらぬやうにあれば、いたく気色ばみたてり。(蜻蛉日記、一五〇―七)

以上の諸例は、「気色ばむ」が動作動詞と結合して、共に主体の意志的動作を表わしているものと考えられる。

B 会話文十(など)+「けしきばむ」

36 「さもさぶらひ馴れなましかば、いまに思ふさまに侍らまし。皆さし放たせ給ひて」と、恨めしげに気色ばみ聞え給ふ。(源氏、朝顔、二七二―二)

37 「吉野の山のちかければ」と気色ばみてすぐるを、たちどまりて、中納言「をかし」と聞き給ふも(夜の寢覚、卷一、八四―一五)

この類の「気色ばむ」は、会話文を受けて、話手の話しぶりや心情など、会話時における話手の状況を説明したものであり、(II 話手)の意志的動作の説明と考えられる。

C 八主体の思想伝達行為の表現

38 親王たちの御座の末に源氏つき給へり。おとど気色ばみ聞え給ふことあれど、物のつつましき程にて、ともかくもあへしらひ聞え給はず。(源氏、桐壺、二八四)

39 其二二人許歩ミ寄テ気色バメバ、兼テヨリ女房二人許居タリケリ。(今昔、卷一九、九八一—二〇)

この類の「気色ばむ」は、主体が、自己の意志・意向を、それらしい様子を作って相手に伝達しようとする行為を表わすものであり、二三例を数える。

D 右以外に、人間の意識・行為(動作)を表わすもの

40 まして、人の心の、時に当りて気色ばめらむ見る目のなさをば、え頼むまじく思う給へ侍る。(源氏、帚木、五〇—七)

41 尽きせぬものかな。此頃の人は、ただ片そはを気色ばむにこそありけれ。(源氏、梅枝、二三七—一一)

42 まだはしにおはしましけるにこのわらはかくれのかたにけしきばみけるけはひを御らむじつけて「いかに」とはせ給ふに(和泉式部日記、二—二二)

この類の「けしきばむ」の表現する内容は様々であり、二四例を数える。

以上のA、D四類は、Aが語彙範疇、Bが文法範疇、C、Dが表現範疇の如く、それぞれ異なる観点より設けたものであるが、考察した如く、「けしきばむ」は、いずれも意志的行為の表現である点で

等しいと考えられる。それに対して、次のEは、例示する如く、「懐妊・陣痛」という自然的現象を表わしており、その点において、上の四類とは異なる。

E 自然的現象(懐妊・陣痛)を表わすもの

43 かくて六月六日この子むまるべくなりぬ。けしきばみてなやめば、女きもころをまどはして「たひらかに」と申しまどふほどに(宇津保、俊蔭、五五—九)

44 これを限りなくあはれと思ひかしづき聞え給ふに、又さしつづき気色ばみ給ひて、この度は男にてもなどおぼしたるに(源氏、橋姫、二—一)

II 主体(対象)が人間以外であるもの

A 木や花である場合

45 正月二十日はかりになれば、空もをかしきほどに風ぬるく吹き、お前の梅もさかりになりゆく。大方の花の木どもも皆気色ばみ、霞みわたりにけり(源氏、若菜下、二九—一一)↑13に既出。

46 菊の気色ばめる枝に、濃き青鈍の紙なる文つけて、さし置きていにけり。(源氏、葵、三五—五—九)

この類のうち、花が主体となっているものは、「蕾を持つ」「蕾が綻びる」などと口語訳されるのであるが、言うまでもなく自然の推移を表わしており、もとより「花」の意志の表現とは考えられない。ただ、「松」を主体とする事例である「いといたう気色ばみ横たはれる松の」(源氏、藤裏葉、二五—二—二)の「気色ばみ」は、

『対校源氏物語新釈』に「氣取った姿をして」と傍注されている如く、これを、一種の擬人化表現と見、意志的行為を表わしていると解することも可能かと思われる。

B 「文」「ありさま・かたち」「振舞」「もてなし」などの場合

47 をかしやかに氣色ばめる御文などのあらばこそかくも聞えかへさめ(源氏、少女、二九六一)

48 なよび氣色ばみたる振舞をならひ侍らねば、人づてに聞え侍るは、言の葉も続き侍らず。(源氏、権本、六九一六)

49 斯かる御あたりに、明石はけおさるべきを、いとさしもあらず、もてなしなど、氣色ばみ恥かしく(源氏、若菜下、三六一一四)他に、既出の例文5が有り、「ありさま・かたち」を対象とする。

この類の「氣色ばむ」は、「文」「振舞」等の状態の表現である。「文」「振舞」等は、本来、人間の営為乃至存在そのものの形式である点において、II Aに掲げた対象とは異なるのであるが、Iの諸項に窺い知られた意志性は、これらには見られない。

次いで「けしきづく」に移る。事例は、次の二例のみである。

50 かかる目は見ずもあるかな。風などは吹けど、氣色づきてこそあれ。あさましう珍らかなり。(源氏、須磨、五四一三)

51 何ばかりあらはなる故々しさも見え給はぬ人の、奥ゆかしく心づかひせられ給ふぞかし。いとおほどかに女しきものから、氣色づきてぞおはするや。(源氏、野分、一一二一九)

50の事例は、風の吹きかた(「前兆があらわれて吹く」)の説明、51は、秋好中宮の性格の説明(「どこか一くせおありになる」と考えられ、いずれも、自然的作用乃至状態を意味すると判断せられるのである。

「よしばむ」「よしづく」

「よしばむ」一一例、「よしづく」一二例で、両者は量的にはほぼ拮抗している。

I 主体が人間であるもの

52 (北方ハ)物まゐりなどし給て、月ごろのつらさをうらみなどし給て、よしばみ給へれど、おさおさいらへもし給はず。(宇津保、忠こそ、二一九一〇)

53 かきりなくおもひかしたつききこえさせ給しかは御せうとの殿原われもわれもとよしはみ申給れときさきかしくせいしまうさせ給て(大鏡、一七四一一)

54 いと黒き墨染にやつれて、もてなしよしばむ事もなくて、袖に顔をおし当ててそばみ給へるが(浜松中納言、巻四、三四八一四)

等における「よしばむ」は、いずれも、主体の意志的行為を表わすものと理解される。しかし他方において、

55 内侍はねびたれど、いたくよしばみなよびたる人の、さきさき

もかやうにて心動かす折々ありければ（源氏、紅葉賀、三〇一—
一一）

の如く、人間の非意志的性情を表わす事例も存する。これを「よしづく」と比べてみよう。

56 我に聞かせよ。父親王の、さやうのかたにいとよしづきて物し給ひければ、おしなべての手づかひにはあらじと思ふ。（源氏、末摘花、二三三—五）

この例は「父親王」が琴の名手であったことを叙したもので、「よしづき」は状態を意味していると考えられる。

57 （夕霧ハ）なほ人にすぐれてあざやかに清らかなるものから、なつかしうよしづき恥かしげなり。（源氏、藤裏葉、二四九—
一三）

58 （故御息所ノ御姉ハ）いとよしづきてをかしくいますかりければ、よばふ人もいと多かりけれど（大和物語、三〇七—一一）

等の「よしづく」も、やはり性情を意味するものである。ただ、特に付言すべきは紫式部日記の一例である。即ち、

59 業遠の朝臣のよしづき、錦の唐衣、暗の夜にも、ものに紛れずめづらしう見ゆ。（四七—八）

この例のままでは、「よしづき」が業遠朝臣の意志的行為を表わすかの如くに思われ、さすれば唯一の例外となるが、日本古典文学大系本、古典文庫本等の注記に述べられてある如く、「かしづき」の誤写と考えられるところである。

II 主体（対象）が人間以外のもの

60 網代のすこしなれたる、下簾垂のさまなどよしばめるに、いたう引入りて（源氏、葵、三二八—九）

61 中川の程おはするに、ささやかなる家の木立などよしばめるに、よく鳴ることを、あづまにしらべて、かきあはせ、にぎははしく弾き鳴らすなり。（源氏、花散里、四四五—一四）↑1に既出。等の如く、「よしばむ」が自然的状态を表わしている。

62 陸奥紙に、いたう古めきたれど、書きざまよしばみたり。（源氏、明石、八〇—一一）

の「書きざま」は、もとより背後に人間が存在しているのであるが、本事例の場合の「よしばむ」は、結果の状態を表わすと理解し得る。この事例と殆ど逡庭の認めがたい事例が「よしづく」の方に存する。即ち、

63 ささぎ御覽せしにはあらぬ手の、いますこし大人びまさりて、よしづきたる書きざまなどを、何れか何れならむと、うちもおかず御覽じつつ（源氏、稚本、六七—八）

右の如くであり、対象の「書きざま」も一致する。「よしづく」には、其他、「打笑ひたるけはひ、今すこしおもりに由づきたり」（源氏、橋姫、二—一五）、「かたちなどねびたれど清げにて、ただならず気色よしづきてなどぞありける」（源氏、夕顔、一一—六七）等の事例が存するが、いずれも性向を表わしており、非意志的である点で共通している。

「なさけばむ」「なさけづく」

「なさけばむ」一例、「なさけづく」二例である。

64 うちうちの御心づかひには、この宣ふさまにかなひても、暫

しは情ばまむ。(源氏、夕霧、二八五—八)

65 このおとどみ給て、「あな心うや。(略)」とのた給^(ママ)けれど、

なさけづい給へるひとにて(宇津保、忠こそ、二四九—七)

66 あそん、なをないぜんにつきて、このまへの物、すこしなさけ

づいてた^(ママ)だいま物せよ(宇津保、内侍督、八五〇—一)

「なさけばむ」は意志的、「なさけづく」は自然的という別は、やはり認められるようである。

「ゆゑばむ」「ゆゑづく」

「ゆゑばむ」は一例、「ゆゑづく」は九例である。

67 いとさうがちに、いかれるての、そのすちともみえずたよひ

たるかきさまも、しもながに、わりなくゆへばめり。(源氏、

常夏、八四八—四||源氏物語大成)

これについては、62の「よしばむ」と同様のことが考えられる。

次いで、「ゆゑづく」について見るのに、「古代のゆゑづきたる

御装束なれど」(源氏、末摘花、二五八—九)、「誠の都のつとに

しつべき御贈物どもゆゑづきて思ひ寄らぬ限なし」(同、明石、九

八一—三)、「ただ少し故づきたる、山賤の柴の庵は」(狭衣物語、巻一、三四—一六)など、主体(対象)が人間以外である場合は、もとより非意志性、自然性を意味しているのであるが、主体が人間である場合においても、

68 さすがに、(母代ハ)故づきて物見知り顔にていと、見ざりし

事をも知りたるやうにもてなして(狭衣物語、巻一、八二—一

三)

69 近衛の御門わたりにこそ、めでたくひく人あれ。何事にもい

と故づきてぞ見ゆる。(堤中納言物語、三七〇—一六)

に窺える如く、人格、性向を表わすのに用いられ、非意志性である点において同様である。猶付言すべきは、次の例である。

70 なほゆへよし過ぎて人目に見ゆばかりなるは、あまりの難も出

で来にけり。(源氏、葵、三六二—二)

この「ゆへよし過ぎて」は、『源氏物語大成』底本では「ゆへつきよ

しつきて」、他の青表紙本は「ゆへつきよしすきて」、河内本は

「ゆへよしすきて」の如く本文が動くが、「ゆゑづく」を状态的に

理解することに支障無いであろう。⁵⁾

「心ばむ」「心づく」

「心ばむ」二例、「心づく」四例である。

71 くはや昨日の返りごと。あやしく心ばみ過ぐさる。(源氏、

末摘花、二六五—一三)

72 ほそやかにたをたをとして、物うちいひたるけはひ、あな心苦しと、只いとらうたく見ゆ。心ばみたる方をすこし添へたらばと見給ひながら(源氏、夕顔、一二八一—一〇)

右の内、71の事例は、『全釈源氏物語卷二』二五一頁に詳述されている如く疑問を残すが、いずれも、心情あるいは情緒を表わす語であることには間違いないであろう。心の動きではあっても、意志的というよりは、性的と見るべきであろう。そして、非意志的という点においては、次に掲げる如く、「心づく」の方が更に増えていると考えられる。この方は、「づく」の実質動詞性が強く、「心がつく」あるいは「心二つく」の意味に解することが穏当かと思われる。

73 いまはてふころつくばのやまみればこそよりこそいらかはりけれ(後撰集六七五)

74 家の子にて見奉りしに、いときやうざくに、仕うまつらまほしと、心つきて、思ひ聞えしかど(源氏、東屋、一一一六)

75 ある人々は心つきたるもあるべし(堤中納言物語、三八三—一三)

「おいはむ」「おいづく」「

どちらも一例ずつしか見出せない。

76 いと小さく細く、なほ童にてあらせまほしき様を、心と老いつき、やつしてやみ侍りにし。(紫式部日記、五八一—一)

77 いつかわかやかなる人など、さはしたりし。老いはみたる者こそ、火桶のはたに足をさへもたげて、物いふままにおしすりなどはすらめ。(枕草子、六九—五)

この両者の区別は極めて困難である。76において、自己の意志に基づくことを表わす「心」という副詞に修飾される語詞は、仮説からすれば、「老いづく」よりもむしろ、意志性を表わし得た「ばむ」と結合する「老いはむ」が相応しい。もし「老いづく」に意志性が有るとすれば、上乗の検討にあって、唯一の例外とならう。

結びに代えて

以上、縷々述べてきたところにより、「ばむ」は「自然的作用・状態」及び「意志的動作」のいずれをも表わし得るのに対して、「づく」は、概ね「自然的作用・状態」を表わすのに限られることが、ほぼ明らかにになったかと考えられる。「ばむ」は、古辞書や漢文訓読語にも用いられている(黄ばむ・黒ばむ)など、使用される位相の広がりをも考慮に入れれば、「ばむ」の方が「づく」よりも広概念であることが言えようか。

問題は、しからば、何故に「気配」「似気」「夕」「色」等には「ばむ」が結合し得ず、又、「ほとり」「あて」「薄黒」「塵」等

には「づく」が結合し得ないのか、という疑問の残る点である。これについては後考に俟たざるを得ないが、「ばむ」には概念の広さに伴う、意味のゆるやかさが有るのに比して、「づく」には、きわやかさが有る点で異なるのではないかと試考している。

注

調査は、平安時代（院政期を含む）成立の、主として漢字仮名交り文学作品の範囲に限られ、索引の公刊されているものについては其に依った。猶、源氏物語は『対校源氏物語新釈』に拠った。

其他は、日本古典文学大系本を用いた。一々、書名、編著者名を掲げることを省略させていただく。

1 阪倉篤義『語構成の研究』一二九、一三七ページ

2 この事実については、阪倉博士が注1 同書、一三二ページ

で既に指摘しておられる。

3 この箇所については、松尾聰博士が『全釈源氏物語巻四』一

四八ページにおいて、諸注を引き詳細に説いておられる。其に従った。

4 日本古典文学大系本『枕草子紫式部日記』一四二ページ、古

典文庫本『紫日記（松平文庫本）』六六ページ参照。

5 『全釈源氏物語巻三』一二九ページ参照。

6 和名類聚抄（十巻本、二十巻本）に「黄病」を「岐波無夜万比」と読んでゐる。又、龍光院藏妙法蓮華経（大坪併治『訓点

資料の研究』所収）巻六に「黄（は）め（ら）不^し」、「黄（は）み^し」が有る。猶、「黒め（ら）不^し」も「黒（は）め（ら）不^し」と訓読してはいかがであらうか。

（高知大学教授）